

閉居する成島柳北

高橋 昭 男

一 免職屏居

徳川幕府の末期、安政元年一月、十八歳の成島柳北は將軍侍講見習に任じられ、安政三年十一月に二十一歳で、代々將軍侍講職を世襲する成島家七代目として將軍侍講に就任する。それより七年間にわたり侍講職にあるのだが、文久三年（一八六三）八月九日、侍講職を解かれ閉門を命じられた。理由は諸説あるものの、幕閣を批判する言動によると見られているが、柳北自身は、「遷上隠士⁽¹⁾」で次のように述べている。

十年文字を以て、君恩の優渥^{ゆうわく}なるに感泣せしが、一朝擯斥^{ひんしつ}をうけて、散班^{さんぱん}に入りぬ。そは風流の罪過によると。或は云ふ^い直^{ちよく}に過て衆^{しゅう}謗^{ぼう}を得ると。或は洋学を主張するの故なりと云ふ。何れにてもよしとして、三年籠居^{ろうきよ}、西学者^{せいがくしゃ}に就て、専ら英書を攻む。大に開悟せしことあり。

この文章は末尾に「明治元年（一八六八）秋の末」と書かれた時期が明記されている。この年の四月（改元前の慶応四年）、江戸城が開城される前日に、柳北は養子・信包^{のぶか}に家督を譲り、向島の松菊

荘に隠棲しているので、その半年後（明治改元は十月）くらの回想である。大意は「十年間にわたり学問を通じてご奉公し、慈愛あふれる恩義に浴したが、突如、不興を蒙り、失職の身となった。理由は、過度の風流三昧によるとも、正論にこだわって、周囲の誹謗を招いたことによるとも、洋学の価値を主張したゆえともいうが、はっきりしない。閉居した三年間で、洋学者に指導を受け、主に英語の書物を読んで、大いに悟ることがあった」とあり、閉居にいたるいきさつと、閉居がもたらした意義に触れている。閉居の間、洋学の勉強に大半の時間を費やした結果、柳北が「大いに開悟せしこと」とは、いかなるものなのか、現存する柳北の日記『投閑日録』⁽²⁾（文久三年八月より元治元年六月）を手がかりに検討してみたい。『投閑日録』はこの閉門の沙汰があつた日より起筆されているので、冒頭を読んでみる。

投閑日録

弘歳二十七

文久三年八月九日癸未晴是日在家申牌前參政田沼玄蕃頭投簡召余於其邸以病託同僚小林栄太請命玄蕃頭伝 命免職屏居監察高力直三岩田半太臨席云余奉仕内廷十年一朝廢黜豈無眷々之情哉

又念才篤学腐投閑置散乃分之宜 聖恩厚大感々謝々

文久三年八月九日 癸未。晴れ。是の日、家に在りて、申牌前、参政田沼玄蕃頭、簡を投じ、余を其の邸に召さる。病を以て同僚小林栄太に託し、命を請ふ。玄蕃頭、命を伝へて、職を免じ屏居せよとす。監察高力直三、岩田半太臨席すと云ふ。余、内廷に奉仕すること十年。一朝にして廢黜せらる。豈眷々の情無からんや。又た、才の篤、学の腐にして閑に投ぜられ、散に置かるるは、乃ち分の宜しきなるを念ふ。聖恩の厚大、感々謝々。

弘は柳北の名・惟弘の弘。大意は、「文久三年八月九日、参政（若年寄）田沼玄蕃頭の邸において、同僚の小林栄太郎を通じ、免職閑居を命じられた。私は江戸城の奥に勤めること（安政元年、侍講見習に任官して以来）十年、突然の免職であり、職に対する未練の情を抑えることはできない。とはいえ、非才にして時代おくれの学者の身であれば、閑職に追いやられるのも分相応というべきか。これまでに將軍が下された恩情の数々に対し、ひたすら感謝するばかりだ」というものである。ところで、「投閑置散乃分之宜」には

典拠があつて、中国唐代の文人・韓愈が、当時の学者の生態を活写した文章である『進学解』中の一句を引用している。「閑職に追いやられるのも分相応」というのが、「投閑置散乃分之宜」にあたり、日記のタイトルを「投閑日録」としたのも、この一句に由来している。「投閑」とは暇な官職に置かれること、あるいは要職についていないことをいう。

侍講見習の期間を含めて、侍講として誠実に勤めた十年の実績に、柳北はそれなりの自負があつたであろう。ただし、勤務した場所は、江戸城の「奥」である。ここは將軍が日常の生活をおくる私的な空間であり、將軍に儒学を進講することが任務であつた。「奥」は「表」の政治的空間とは無縁の場であり、現実の政治の世界とは隔絶されていた。一方この十年は、安政元年のペリーの再度の来航による日米和親条約の締結、安政二年の江戸大地震、安政五年にはじまる安政の大獄、万延元年の井伊大老暗殺、文久三年の勅許問題による將軍家茂の上洛、さらに薩英戦争とつづく激動の時代であつた。十代後半から二十代後半の、いくら奥勤めの身の上とはいえ、血気さかんな青年儒者柳北が、時代の推移に無関心でいられるはずもなく、政治的発言を口走ることがあつたとすれば、それはむしろ当然の成行であつた。しかし、「免職屏居」の理由が幕閣批判の言動に起因するとすれば、「奥」勤めの非政治的立場にあるべき儒者の許されざる行為として捉えられるのは、これもまた当然のことである。

柳北がこの激動の時代に、どのように身を処したのかは、現存する日記や詩文から推測するしかない。安政元年から万延元年にかけての柳北の日記『硯北日録』（安政六年の分は欠本）は、江戸城内での進講の内容、自宅での講義や日常生活の記録などが簡潔に記されているが、政治的発言は全くないといつてよいほど、慎重に避けられている。ところが遺された詩文のなかでは、青年儒者としての、世の趨勢に対する思いのたけが述べられている。その一例を見てみよう（訓読の送り仮名はママ）。

一朝翻然倒篋籠 一朝 翻然として 篋籠を倒し
 千卷換得錢幾錠 千卷 換え得たり 錢幾錠
 去向東市購孤劍 去きて 東市に向いて 孤劍を購う
 老鉄之鏢古銅鑲 老鉄の鏢 古銅の鑲
 此物不知果何用 此の物 知らず 果して何の用ぞ
 提舞自欲振羸辱 提舞して自ら羸辱を振わんと欲す
 霜鋌凜兮吾氣奮 霜鋌 凜たり 吾が氣 奮う
 心兵出沒天地間 心兵 出沒す 天地の間
 有時乎秘之匣底 時有つてか之を匣底に秘め
 有時乎加之百蠻 時有つてか之を百蠻に加えん
 休道一劍不足字 道を休めよ 一劍 学ぶに足らずと
 方今無人力拔山 方今 人の 力 山を抜く無し

「書を売り劍を買う歌」と題された七言古詩の後半で、柳北二十五、六歳、文久元年冬か二年春の作とされる。尊皇攘夷運動激化の最中である。「ある朝、意を決して書棚を引き倒し、沢山の書物を金に換えて、東の市場に行き、ひとふりの劍を買った。古色を帯びた鏢と鑲。これが何の役に立つのか分からぬが、手に持って舞って、臆病風を吹き払おうとする。霜のような切つ先が冷たく冴えて、私の氣を奮い立たせ、その奮い立った氣が天地を駆け巡る。あるときはこの劍を箱に隠して志を秘め、あるときは劍をもって夷狄どもを切りつけてやりたい。劍を学んで何の役に立つかなどとは言つて欲しくない。あの項羽のごとき山を引つこ抜く英雄などいない世の中なのだから」。

この詩において柳北は、経世済民を標榜する儒学の有効性に対する不信と、儒者として文官に甘んじている自らに対する煩悶に苦しんでいる。詩の内容は劍をふるつて攘夷を行なうことへの単純な賛同のように見えるが、日野龍夫氏は「劍はいうまでもなく比喩であつて、儒者であることをいさぎよしとしない柳北の求める、真にやり甲斐のある何かを指す。この時期にはすでにそれを洋学（後年の履歴からすると、特に西洋流の兵学）と見定めていたと思われる。最後の二句は、洋学などやっても仕方がないという周囲の批判に対する、反論の意を表わすのであろう」と解釈しておられる。

柳北のこうした儒学への懐疑的な姿勢や、幕閣に対する批判的な態度は、おそらく幕閣の知るところとなつたのではないか。『投閑日録』の冒頭を読むと、柳北はすでにこの日のあることを予測し、肚を決めていたように思える。事態を淡々と受け入れ、冷静に身を処したといえる。「澤上隠士伝」の回想も柳北の決意を裏付けており、また、韓愈の「進学解」を引用しているあたりも、どこか余裕すら感じさせる。というのは、八月九日の二日後の十一日の記事に、「余日本日読蘭文典（余、本日より蘭文典を読む）」と記載されているからだ。免職され閉門になつたばかりの儒者が、オランダ語の文法書を読み始めるというのは、いささか意外な感を起こさせるが、すでに準備はされていたのであり、柳北の洋学への関心は大きなものがあつたのである。

二 閑を楽しむ

実際のところ、蘭医の桂川甫周（かつらがわはしろう）、洋学者・柳河春三（やながわしゅんさん）などとはすでに交流が始まっていた。桂川甫周の覚書き「太平春詞」（し）には次のような記載がある。

正月廿七日成島発会宿題

梅辺小飲 朝陽

水光花影一時新 水光 花影 一時新たなり

把酒登楼天地春 酒を把つて楼に登れば 天地は春

主人欲眠客亦醉 主人は眠らんと欲し 客もまた酔ふ

喚指梅花為主人 梅花を喚び指さすは 主人たり

正月の二十七日、成島柳北邸でこの年初めての詩会があり、朝陽が宿題の詩「梅花小飲」を示した、という記載だが、ちなみに朝陽は柳河春三の雅号である。「太平春詞」には文久三年正月一日から元治元年二月までの、歌や詩、俗謡のたぐいが雑記されているのだが、この記事は「太平春詞」冒頭にあるので、文久三年の正月であることが分かる。すなわち、柳北はまだ侍講職にあり、在任中の柳北の洋学者たちとの交流を裏付けている。「成島発会」というのは、始めて会を開いたということではなく、今年始めての会の意であるから、柳北邸での集りは、おそらく数年前から始まっていたものと思われる。そしてこの集りは、慶応元年正月から慶応二年の正月にかけての、閑居中の柳北邸で開かれていた洋学者たちとの会合につながるもので、そこで作られた詩歌雑文俗謡の覚書きが、四卷の

『伊都満底草』である（前掲『柳北全集』に収載）。春三の詩は、この邸の主人にして梅を愛する柳北への、正月を寿ぐ挨拶であるが、いかにも春風駉蕩として、騒乱の世を超越しており、心を許しあつた親友たちの寛いだ雰囲気を髣髴させている。「登楼」の楼は、柳北邸の書齋・春声楼のことである。ここに漲る和やかな雰囲気は、『伊都満底草』全編にも漂っており、若い洋学者たちの自由で開放的な精神の発露によつてもたらされたものである。

將軍侍講職を解かれ、閉門になることは、言い換えれば何の規制も受けずに、自由な時間を享受できる環境を手にしたことになる。

一脱朝衣臥草廬 一たび朝衣を脱して草廬に臥す

俸多未要学樵漁 俸多くして未だ要せず 樵漁を学ぶこと

を

天公賜我閑如許 天公 我に賜ふ 閑 許くの如きを

讀得平生欲讀書 讀み得たり 平生 讀まんと欲するの書

「感懷」と題された七言絶句の二首の内の一首で、文久三年秋、

閉門直後の作といわれる。「天公我に賜ふ 閑 許くの如きを 讀み得たり 平生 讀まんと欲するの書」という一聯がすべてを語つており、洋書を繙くことに集中するのである。さらに『投閑日録』

の文久三年九月二十九日の条に次の記載がある。

二十九日 癸酉齋 参政平岡丹州有簡余底其邸以疾遣青山芳

太請命丹州伝命免屏居欣々幸々

二十九日 癸酉。霽れる。参政平岡丹州、簡有り。余をして其

の邸に底らしむ。疾を以て、青山芳太を遣し、命を請ふ。丹州

立つたが、文久三年に松本良順により、その地位を追われた。柳北とはその後も長く交流があった。ちなみに伊東邸は、和泉橋通りを挟んで柳北邸の筋向かいにあった。

(九月) 六日 庚戌晴陰不定 與二生読瀛環志略起業(二生と瀛環志略を読むことを起業す)

『瀛環志略』は一八四九年(嘉永二)に中国で出版された世界地理書。著者は徐繼畬。西洋人からの聞き書や宣教師の文書をもとに書かれ、地名の表記が正確であるとされている。「起業」は『硯北日録』においては、テキストの会説の始まりを意味するので、名は表記されていないが、二人の弟子(二生)と読書会を始めたのである。『瀛環志略』はもちろん漢文であるが、柳北邸での講義で儒教関連以外のものが、テキストに用いられたのはこれが初めてではないか。一八六六年に再版。海外の実情を知るには、まず世界地理の概念の把握が重要であり、こうした書物を繕いたのであろう。

(九月) 十日 甲寅晴 晩神田立石宮氏善叟来西坡至(晩、神田、立石、宮氏、善叟来る。西坡至る)

神田は神田孝平で洋学者。文政十三年(一八三〇)〜明治三十一年(一八九八)。伊東玄朴などに蘭学を学ぶ。文久二年(一八六一)開成所数学教授、慶応四年(一八六八)同頭取に就任。柳北邸での会合にもしばしば出入りした。

(九月) 十四日 戊午陰 西坡来告本日閣賊與外国士官議鎖横浜港可嘆々々(西坡来りて、本日、閣賊、外国士官と横浜港を鎖すことを議すと告ぐ。嘆ずべし。嘆ずべし)

西坡は竹内玄同。蘭医で幕府奥医師。柳北邸にしばしば出入りする。文久三年五月、孝明天皇は攘夷勅命を発し、また諸外国との軋轢が高まる折、幕府は攘夷派を懐柔するために、横浜鎖港を計画し、同年十二月には横浜鎖港談判使節団をフランスに送る。しかし、この計画が実現するはずもないことを、柳北は九月の時点で見抜いている。「閣賊」とは一部の幕閣を指している。「賊」とは随分思い切った形容であり、その無定見さを「嘆ずべし、嘆ずべし」としている。

(十一月) 四日 丁未晴 朝陽来話

朝陽・柳河春三は、柳北の親友といえるほどの交際があった。天保三年(一八三二)〜明治三年(一八七〇)。蘭・英・仏の三カ国語に通じ、語学の天才といわれる。元治元年、開成所教授に就任、慶応四年、同頭取。文久三年「会訳社」を起し、当時、横浜にて発行された『日本商業新聞』などの英字新聞から日本関係の記事を抄訳して、『横浜新聞』と題する新聞を発行した。慶応四年にはわが国最初の本格的新聞『中外新聞』を発行。和歌をよく詠み、俗謡作りの名手でもあった。この日からしばしば来宅が記載されている。

(十一月) 二十九日 壬申晴 安田福田(中略) 来

安田は洋学者の安田次郎吉。文久元年、外国奉行支配調役。文久二年、奥右筆所詰。元治元年に開設された横浜英学所にも関係する。柳北とはかなり親しい間柄で、しばしば酒席を同じくした。福田は福田作太郎ではないか。文久三年、神奈川奉行支配組頭。元治元年、鉄砲製造奉行。慶応三年、歩兵頭並。福田の出入りも極めて多い。

(十二月) 三日 乙亥晴 藤沢宇都宮(中略) 来

藤沢は桂川甫周の実弟である藤沢志摩守次謙（しんせつ）。文久二年、講武所頭取から歩兵頭（ほへいのかみ）（役高二千石）。勝海舟の腹心といわれ、後に軍艦奉行。咸臨丸の米國訪問にも随行する。宇都宮三郎は洋学者。天保五年（一八三四）〜明治三十五年（一九〇二）。軍学者として西洋砲術を学び、化学に志す。「化学」という用語を學術語として最初に用いた。兩人とも、柳北や甫周の邸での会合の常連。

（十二月）四日 丙子晴 始学英典神田来（始めて英典を学ぶ）この年、開成所より『英吉利文典』が刊行されている。これは一八五〇年（嘉永三）にロンドンで刊行された『The Elementary Catechism, English Grammar』の翻刻である。紙数も少ない、小型本で、『木の葉文典』と呼ばれたが、当時は唯一の英文典であったので、大いに利用された。柳北もこの書の刊行に刺激されたのかも知れない。この頃より、オランダ語よりも英語の方が実用的とされる潮流が始まっている。

（十二月）二十三日 乙未晴 田辺太一来辞以念七日航欧発途也（田辺太一来りて辞す。念七日を以て、欧に航するの発途なり）田辺太一が暇乞いに来る。二十七日が欧州へ渡航の出発ということだ）

田辺太一は外交官。天保二年（一八四一）〜大正四年（一九一五）。幕府外国方として、文久元年外国奉行支配調並。この出発とは、先に触れた「横浜鎖港談判使節団」のフランスに向けた出港で、田辺は使節団の随員であった。なお、友人の水晶葉太郎（洋学者・外国奉行支配調役）も随行した。

（十二月）二十五日 丁酉好霽 児七夜賀筵藤肥州命筥之助取凌雲之意賀客酒并桂川宇都宮福田河野為助立石渡瀬楠山鳴瀬小原飲春小繁亮藏善叟等来大酌（児の七夜の賀筵なり。藤肥州、筥之助と命づく。凌雲の意を取るなり。賀客は酒井、桂川、宇都宮、福田、河野、為助、立石、渡瀬、楠山、成瀬、小原、飲す。春、小繁、亮藏、善叟 等来る。大いに酌む「男の子のお七夜の祝宴があった。藤肥州が筥之助と命づけたが、これは筥（はら）が雲を凌いで成長するの意を取ったのである。（中略）。大いに飲んだ）

これは十九日に「阿蝶産男児（お蝶男児を産む）」という記事があり、愛人のお蝶との間に待望の男児が生れたので、閉居中ではあるが親しい人々を呼んで、お七夜の祝いの宴を催したわけである。藤肥州とあるのは、藤沢次謙がこのときは肥後守であったからである。春、小繁は芸者であろう。友人知己親戚が集まった、楽しい一夜であり「大酌」したとある。

（十二月）二十七日 己亥晴 本日台駕駕軍艦西征（本日、台駕、軍艦に駕して西に征す）

台駕は貴人の乗物の意であるが、ここでは將軍をさす。將軍家茂が、この年三月に上洛し、義兄にあたる孝明天皇に攘夷を誓い、六月に帰城したが、それから二度目の上洛になる。そして、この年も大晦日となる。

（十二月）三十日 壬寅晴 本年投閑歳晚事件頗簡了心恬身安亦一得意也（本年投閑、歳晚の事件、頗る簡に了る。心恬（しんげん））

身安んじて亦た一たび意を得るなり「無役のまま、年の暮れに
なり、大した出来事もなく了る。日々の暮らしは落着いたもの
で、これはこれで快適なのだ」

この年の八月九日に閉門となつて、大晦日を迎えた柳北の感慨で
ある。淡々とした生活であるが、満ち足りた日々であつた。

文久四年（元治元年）

（正月）十日 壬子雨 今春英学起業（今春の英学を起業する）

今年になつてからの英学の学び始めである。十二月四日に「英文
典を学び始め」てより、英学に身を入れた柳北は、洋学者たちとの
交流をますます頻繁にする。

（正月）二十四日 丙寅晴 善兵来立石月池来酌招阿雪月池宿

（善兵来る。立石、月池来りて酌む。阿雪を招く。月池宿す）

（正月）二十六日 戊辰霽 楊大听安田子来話大听宿（楊大听、

安田子来り話す。大听宿す。）

月池は桂川甫周の雅号である。楊大听は柳河春三の唐名。安田は
安田次郎吉であり、この三人は柳北の最も親しい洋学者たちである。
甫周・春三があいついで泊りこんでいるのは、柳北とこの二人で何
か期するものがあつたように思える。安田も英語をよくしたから、
柳北が英語に身を入れ始めたことと、何らかの関連があつたのでは
ないか。さらに二月の半ば頃から、神田孝平、甫周、安田、柳河と
いつた面々がしばしば来宅している。

（二月）二十九日 丙子晴 神田来読智還啓蒙（神田来る。智

還啓蒙を読む）

「智還啓蒙」

は一八五六年（安政三）、香港のジェームス・レッグ
が発行した英漢対訳の教科書で、キリスト教を含めた西洋文化を紹
介した啓蒙書である。一八六〇年（万延元）オランダの宣教師・フ
ルベッキにより長崎に輸入され、慶応二年には江戸開物社にて調点
を付し翻刻されている。柳北が使用したのは、輸入されたものであ
ろう。なお翻刻版には翻刻者の名前が記されていないが、柳河春三
の手によるものと見られている。春三から甫周宛の手紙の一節に、
柳北に会ったところ、柳北が所持している香港再版の方が、誤りが
正されているので、これを使えばよいと貸してくれた、とある。⁽⁸⁾

（三月）一日 丁丑陰 本日改元元治（本日、元治と改元す）

年号が改まり、洋学者たちの来宅はますます頻繁となる。

（三月）十二日 戊子晴 月池唐通秋水阿格小玉等来

唐通は神田孝平の雅号。「河淮経略姑蘇監田唐通」という擬名を
略したものである。秋水は宇都宮三郎の雅号。この夜は柳北と三人
の洋学者による宴会で、阿格、小玉は芸者であろう。

（三月）十三日 己丑晴 月池秋水来柳川来楠山小林来

柳川は柳河春三で、「河」であつたり「川」であつたり、時によ
り表記が変わる。楠山は楠山孝三郎で、柳北の実兄といわれている。
小林は、侍講であつたときの同僚・小林栄太郎ではないか。この後、
安田次郎吉の来宅が多く、時には泊つてもいる。柳北邸よりもさら
に多くの洋学者たちが集まつた溜り場は、桂川甫周邸であつた。桂
川家は代々つづく蘭医の御典医であり、福沢諭吉が次のように証言
している。⁽⁹⁾

其の家は日本國中蘭学医の総本山とでも名を命^{なづ}けて宜しい名家であるから、江戸は扱置き日本國中蘭学社会の人で桂川と云ふ名前を知らない者はない。ソレ故私なども江戸に来れば何は扱置き桂川の家には訪問するので、度々其家に出入して居る。

生来の客好きの柳北と、洋学者のシンボルの存在の甫周。柳北・甫周の邸に出入りする洋学者たちは、激動する日本の近代を切り開く先頭集団であったが、必ずしも幕府はその存在の有効性を認めておらず、一方過激な攘夷派からは国賊視され、時には生命の危険すらあった。

四 武人としての再出仕

元治元年も五月に入ると、新しい顔ぶれの洋学者たちの名が見える。五月四日「栗本（栗本鋤雲）、矢田堀（矢田堀景蔵）」、五月十二日「箕作（箕作秋坪）」、五月二十六日「松浦竹四（松浦武四郎）」とある。栗本、矢田堀については後述する。箕作秋坪は文化八年（一八二六）〜明治十九年（一八八六）。開成所教授手伝いから、文久元年、幕府遣欧使節に随行。松浦武四郎は文化十五年（一八一八）〜明治二十一年（一八八八）。本草学者、探検家。蝦夷地の探検・調査で名を馳せる。北方の防御についての情報を、柳北は受けたに違いない。

松浦の記事に続けて「乙骨太郎乙来授英文典（乙骨太郎乙来。英文典を授ける）」とあり、柳北は乙骨に英語の文法を教えている。「英文典」のテキストは、例の開成所より刊行された『英吉利文典』

と思われる。文久三年十二月四日に「始めて英語の文法書を学ぶ」から、文久四年正月十日の「英学起業」の記事を経て、あしかけ五ヶ月あまりで、英語の基礎的文法を習得したのである。乙骨太郎乙は後に開成所教授に就任している。ほかにいつもの常連が出入りしているのだが、注目すべきは五月四日から六日にかけての記事である。

（五月）四日 己卯晴 栗本矢田堀等廿輩来繁至（「栗本、矢田堀等と二十人の連中が来る。芸者のお繁もやってきた」）
 （五月）五日 庚辰晴 客半留飲盡歡衆皆舞論（客の半ば留りで飲を尽くした。皆、舞い踊り、かつ論じあった）

（五月）六日 辛巳晴 倦卧（倦て卧す「疲れて、横になっていた」）
 二十人以上の男たちがやって来て、大いに飲み、かつ踊り、談論風発し、大半が泊り、客が帰った後の翌日はどっと疲労が出て、寝込んでしまったという。閉居中の柳北にとっては異例で、慶事のほかに、こうした記事は『投閑日録』にはない。一体どういういきさつでこうなったのか。「二十人の輩」とはどのような連中なのか。まず、栗本・矢田堀の人物像から解きほぐしてみたい。

栗本は栗本鋤雲。文政五年（一八二二）〜明治三十年（一八九七）。奥医師にして医学館で講ず。文久二年箱館奉行。文久三年、江戸に戻り、昌平坂学問所頭取、元治元年、目付、慶応元年、幕府軍艦奉行並、同年、外国奉行となる。フランス軍事顧問団による幕

府陸軍の強化の一環として、仏語を解する士官候補生の育成のため、慶応元年、横浜仏語伝習所が設立されるが、小栗上野介忠順（たんまき）とともにこれにかかわった。さらにフランスの軍事教官団招聘にも関与。後に、フランスの援助による横須賀製鉄所設立にも尽力。矢田堀は矢田堀景蔵。文政十二年（一八二四）～明治二十年（一八八七）。

矢田堀は安政二年（一八六五）に出来た、長崎海軍伝習所の第一期生であり、海軍畑ひと筋である。幕府軍艦操練所頭取を経て、文久三年、幕府軍艦奉行並。幕府最後の海軍総裁。

この時、元治元年五月の時点で、栗本は昌平坂学問所頭取、矢田堀は幕府軍艦奉行並の職にあった。栗本・矢田堀は、柳北・甫周周辺の洋学者グループとは、いささか距離感があるように思えるのは、兩名とも幕府の中核に近い地位に在るからであろう。二十人の連中は「輩」と表記されているから、身分の高い者たちではなく、栗本・矢田堀の履歴を勘案すると、あくまで推測であるが、矢田堀が頭取であった軍艦操練所で訓練されている、血気盛んな青年武士たちあたりではないだろうか。軍艦操練所は築地小田原町の講武所内にあり、柳北邸までは舟を使えば、邸に近い和泉橋までさほどの距離ではない。栗本は前年まで函館奉行を勤めており、幕府海軍との関係が深かった。

栗本が蝦夷地へ赴任したのは、奥医師であった安政五年（一八五八）に禁忌に触れ、左遷されたためなのだが、その出発前の安政五年四月一日に柳北邸に暇乞いに来ている。『硯北日録』には「栗本瑞見来豪談劇飲蓋蝦夷発程前筈也（栗本瑞見「鋤雲の名」が来て、

大いに語り、大いに飲んだ。これは蝦夷へ旅立つ前の別れの宴である）」と記されており、よほど親しい関係であったと見える。従って、柳北と栗本は五年ぶりの再会であった。何がきっかけで大勢が押しかけたのかは見当もつかぬが、二日間にわたり談論風発したテーマは、諸外国に対する国防についての論議であったにちがいない。この熱い論議に参加した柳北は、二十名の男たちに心の底から共感したことであろう。この二日間の出来事は、柳北にとって一つの転換点をもたらすものであったように思える。

なぜこのように推測するかというと、この翌年の慶応元年九月に、柳北は歩兵頭並に任じられるのである。足かけ三年にわたり閉居していた儒者・柳北が、文人から突如武人として復職するということには、いささか唐突感があるものの、柳北は幕府直属の旗本であることを忘れてはならない。「幕府」の本来の意味は、出征中の將軍の陣営のことである。開府以来、二百六十年の平和を維持して来たとはいえず、幕府である以上は、つねに臨戦態勢にあるのが原則なのだ。旗本は一朝事あるときには、將軍護衛のために馳せ参じることが義務づけられているのである。『硯北日録』によると、柳北は時に武術の稽古に通っており、どの程度のレベルなのかは不明であるが、武術の鍛錬に対する意識があったことは間違いない。また、「書売り剣を買ふ歌」という詩をすでに見たが、そこには西洋の兵学に関心をもつ柳北の姿があった。閉居して洋学に打ち込み、数多くの洋学者たちとの交流を通じて、西洋の学術・文化の価値に目覚めた柳北は、諸外国との対等な関係を構築するには、国防の充実に

喫緊の課題として求められていることを実感したに違いない。栗本・矢田堀たちとの出会いが、閉居三年の柳北の意識に、将来への大きな弾みをつけたことは、十分考えられる。

ところで柳北を歩兵頭並に推薦したのは誰かという疑問が残る。

栗本・矢田堀が後押ししたであろうことは、間違いない。前田愛氏は「栗本鋤雲の推挙により、歩兵頭並に登用されるのは、九月二十八日である」と、明言されている。そして栗本鋤雲がフランス軍事教官団招聘に大きな役割を果たしたことが、歩兵頭並として横浜に赴任する柳北の最初の任務に関連してくるのだが、後に触れる。もう一人、重要な人物がいる。それは桂川甫周の実弟である藤沢志摩守である。あらためて藤沢の履歴をみると、文久三年十二月、歩兵頭。元治元年十月講武所頭取、慶応元年七月、歩兵奉行並と、文久二年に新設された三兵式陸軍の中樞に役付している。とくに柳北が任官した九月に歩兵頭であったことは、推薦者としての資格を十分に備えている。藤沢は柳北とは旧知の間柄であり、文久三年十二月、柳北に男児が授かったときの名付け親にもなっていることはすでに見た。元治元年には軍艦操練所のある講武所の頭取でもあった。また柳北・甫周周辺の洋学者グループに極めて近く、藤沢邸でもしばしば洋学者たちの会合が開かれていたことは、福沢諭吉が『福翁自伝』で証言している。

柳北の歩兵頭並任官は、周辺の洋学者たちにとっても嬉しい慶事であった。甫周はその覚書き『隨身巻子』の慶応元年九月二十八日から十月二日の条に次のように記している。

二十八日 成島歩兵頭並被仰付候に付参り其夜奇事あり云々
二日 誰園箕作福沢柳河楠山来梅鳥倍従(誰園、箕作、福沢、柳河、楠山、来る。梅、鳥、倍従す)

二十八日、甫周は柳北の復職を祝いに成島邸に駆けつけたのである。十月二日、愛篁亭(愛篁は甫周の雅号)で、柳北の任官の祝賀会があり、出席者は誰園(柳北の雅号)、箕作秋坪、福沢諭吉、柳河春三、楠山孝三郎で、芸者のお梅とお鳥が陪席した。その席で柳北は興にまかせて漢詩を二首詠んだ。詩の内容は、ともに復職によって三年にわたる幽居から解放され、親しい友人たちに祝いの宴を開いてもらった喜びに満ちあふれている。

五 洋学と柳北

三年にわたる閉居が柳北にもたらしたものは、何か。「西学者に就て、専ら英書を攻む、大いに開悟せしことあり」と、柳北は語っている。『投閑日録』は文久三年八月から元治元年六月までの、一年足らずの記録であり、以後の日記は現存しない。大島隆一氏の『柳北談叢』によれば、かつて大島氏が所有されていた柳北の『春声楼日乗』には、翌年の慶応元年三月から五月にかけて、柳北邸で英文典の会読が行なわれたことが記載されており、柳北が「専ら英書を攻」めたことが裏付けられている。語学の勉強だけでなく、多岐にわたる洋学者との交流によって、柳北の世界観は大幅に変更を迫られたであろう。交流した洋学者の専門をみると、医師・語学者・科学者・外交官・軍人と、幕末の日本に要請された近代化の、

最先端に位置する西洋文化の紹介者たちであった。そしてこれらの洋学者たちから、最新の海外情報を学ぶことができた。しかし、柳北は儒学者であり、洋学者に鞍替えしたわけではない。語学を例にとれば、英語を始めたのが文久三年の十二月であるから、任官し横浜に赴任する慶応元年の十二月まで、二年ほどでしかない。英語の語学力もそここの程度であつたらう。いわんや、専門とする西洋の学問を学んだわけでもないから、洋学者とは言えなかつたが、福沢諭吉が次のように好意的な証言をしている。

殊に此人は読書の才に富むことなれば、翻訳書など読むに苦もなくして、追ひ／＼に西洋の事情を明にし、遂に儒学の旧を脱して文明の主義に移り、当時西洋流の率先者として世に名を知られたり。漢字訳の万国公法一部を始めて日本国に輸入したる者は此成島氏なり。

歩兵頭並に任官して閉居に終止符を打つたのは、まだ二十八歳の旗本・柳北にとつては、唐突な行動であるというよりも、むしろ自然の流れといった方が良いのかも知れない。幕府は軍制の改革を急いでおり、すでに歩兵・砲兵・騎兵の三兵式陸軍を創設していたが、その成果ははかばかしいものではなかつた。

抑々旧来の軍制を廃し、洋式に倣ひ、始めて歩・騎・砲の三兵を編成したのは文久二年の事であつた。夫れより既に四五を経なければ其事固より一時の仮定に出で、且つ中間種々の障碍ありて、夫れに連れ事功が挙げらず、慶応元年に成つても、尚一定の規律が立たなかつた。(中略)そこで慶応元年十二月の頃、

陸軍奉行並小栗上野介忠順・陸軍御用取扱浅野美作守氏祐の二人が、栗本瀬兵衛鋤雲を訪うて、仏国公使に就き教師雇入の件を託した。(中略)慶応元年十二月、陸軍三兵伝習を開くに就いて、横浜近傍に屯所其他を設くる事に關し、合原左衛門尉義直・成島甲子太郎(柳北)・岡田左一郎・万年真太郎等に取扱を命じ、明年二月までに、普請落成する様申付けた。而して正月、歩兵頭並川勝近江守広運を、二月、歩兵指図役頭取福田太郎を御用掛とした。蓋しやがて雇入るべく仏国教師の来着に備ふる為めである。⁽¹³⁾

幕府は、軍制改革を強固なものにするには、フランスの軍事教官団を雇うしかないと決断し、栗本鋤雲が斡旋してフランス公使ロッシュの快諾を得、教官団が到着する前に軍事訓練にふさわしい屯所の設営をはかつた。歩兵頭並・成島甲子太郎の最初の任務がこれであり、次のような任命があつたのである。

慶応元年乙丑十二月十九日

成島甲子太郎

仏蘭西国へ陸軍三兵伝習御頼み相成り、今度御開きにつきては、横浜近傍へ屯所そのほか御取設け相成り候間、御普請中まづ詰切りの心得を以て罷り越し、御入用等まで万事引請け取扱ひ、来る二月下旬までに御普請落成相成り候様取扱ふべき旨、合原左衛門尉へ達し候間、其の方義も同様申し合せ、取扱ひ候様いたさるべく候こと⁽¹⁵⁾

慶応二年一月、柳北は横浜に赴任し、慶応三年十二月まで軍務に

就く。大島氏の『柳北談叢』によれば、『春声樓日乗』慶応二年正月九日の条に次のような記事がみえる。

正月九日己巳 晴 騎而觀練兵地形 經蒔田井戸谷程
谷婦 仏人比蘭為導 河栄來訪客舎 夜赴浅作州宿(騎して練
兵の地形を觀る 蒔田、井土谷、保土谷を経て歸る 仏人比蘭、
導きをなす 夜、浅作州の宿に赴く)

これは柳北が横浜の任地に赴任した直後の、屯所の設営工事にあ
たって下見をした記録である。比蘭は教官団の騎兵曹長ビュランで
あり、浅作州は前述の浅野美作守である。謝農安(シャノワース)
を团长とするフランス軍事教官団が、横浜太田屯所に着任したのは、
慶応三年の一月であった。軍事訓練はすべてフランス語で行なわれ
たといわれている。柳北のフランス語がどの程度通用したかは不明
だが、二年にわたる英語の学習の実績は、フランス語習得にも大い
に役立つはずであり、何よりも、西洋事情に通じていたことが、
外国人との交流を円滑にしたものと思われる。しかし、この年の十
二月には軍務から離れてしまうのである。柳北の「澤上隠士伝」は
この前後の事情を次のように記している。

二十九の秋、突然歩兵頭並に擢でられ、家になかりし千石の
禄を賜ふ。其冬騎兵頭並に転じ、仏蘭西騎兵伝習の事を建言し、
其命をうけて、翌年より横浜に陣營を造り、大に操練の事を督
せり。營築の事、三兵の管轄、みな隠士の手により。仏国の教
師謝農安は至て親しかりし。三十一の夏に、騎兵頭に登り、二
千石に加俸す。その秋、騎兵奉行の事をつとむべきよし命あり。

隠士筆硯に成立したれども、時運に深意ありて、陸軍一局に非
常の精神を費せしかど、竟に其志の如くならざるを憤り、病に
臥して職を辞しぬ。家に卧す僅三十日にて、慶応戊申(四年)
の早春に、外国奉行に榮転し、従五位下大隅守に叙任す。其月
の末に会計の副総裁に進み、參政の班に加はれり。此時は大坂
敗走の後なり。隠士会計局の空乏なる折に逢ひ、奮てなせし事
もあるべし、其詳はしらず。大君の東台に蟄し給ふ後、隠士三
千円の俸金と総裁の職を返し奉りて隠る、時に年三十二。
慶応四年の一月、幕府の余命があと四ヶ月の時期に、柳北は突如
として外国奉行、続いて会計副総裁に榮転するのだが、そこには次
のような背景があった。

幕府後の慶喜に関していま一つ注目しておかねばならないのは、
彼が徳川家の職制(組織)を、幕府のそれではなく、一大名の
それ(家政)にふさわしいものに改めたことである。つまり、
譜代大名からなる老中職を廃止し、主として旗本クラスを総
裁・副総裁に任命した。ここに職制のうえでも幕府は消滅(解
散)することになる。その結果、板倉(勝静)や小笠原長行は
罷免され、新たに勝海舟(陸軍総裁に就任)や大久保一翁(会
計総裁に就任)らが、徳川家の運営に当たることになった。
こうした対応を整えたうえで、十五代將軍徳川慶喜は上野の東叡
山寛永寺に蟄居してしまふ。柳北は幕臣としての任務を遂行した上
で、この年の四月、江戸城開城の前日に、養子信包に家督を譲り、
向島須崎村の松菊荘に隠棲するのである。

明治五年（一八七二）、東本願寺法主の欧米視察に随行した柳北は、「仏国の教師謝農安は至て親しかりし」そのシャノワーズとバリーで再会していることが、視察旅行の紀行文『航西日乗』に記されている。

- 注1 成島柳北『柳北全集』一頁 文芸倶楽部第三卷第九編臨時増刊 博文館 一八九七年
- 2 成島柳北『硯北日録』（投閑日録）収載）太平書屋 一九九七年
 - 3 日野龍夫注『江戸詩人選集第十五卷 成島柳北 大沼枕山』岩波書店 一九九〇年
 - 4 今泉源吉『蘭学の家 桂川の人々「最終篇」』二二六～二七頁 篠崎書林 一九六九年
 - 5 日野氏注前掲書
 - 6 大槻如電『日本洋学編年史』六五二頁 錦正社 一九六五年
 - 7 乾 照夫『成島柳北研究』七〇頁 べりかん社 二〇〇三年
 - 8 尾佐竹猛『新聞雑誌の創始者 柳河春三』六五頁 近代日本学芸資料叢書第九輯 湖北社 一九九八年
 - 9 慶應義塾編『福沢諭吉全集第七卷 福翁自伝』八六頁 岩波書店 一九五九年
 - 10 前田愛『成島柳北』一四九頁 朝日選書 朝日新聞社 一九九〇年
 - 11 早稲田大学古典籍総合データベース
 - 12 大島隆一『柳北談叢』一〇八頁 昭和刊行会 一九四三年
 - 13 前掲『福沢諭吉全集第六卷 福翁百話』三一八頁
 - 14 『横浜市史稿』政治篇2 三六五～三七頁 横浜市役所 一九三一年
 - 15 『勝海舟全集第十四卷 陸軍歴史Ⅳ』一三五頁 講談社 一九七五年
 - 16 大島・前掲書六二頁
 - 17 家近良樹『徳川慶喜』二四二頁 吉川弘文館 二〇一四年

（たかはし・あきお 大学院博士後期課程在学）